

観光客の殆んどが今後長距離バスなどによる旅行となることに対応し、快適な自動車旅行を確保するため、バスターミナル、展望休憩施設、駐車場等交通便益施設の整備を促進すべきである。

観光開発は、地域の人の所得の向上、観光関連産業への就業の増加、さらには

地場産業の振興など、その経済的効果は大きい。特に阿蘇においては、畜産および林業と観光事業の併進は極めて重要であり、草地改良による草地利用の効率化、観光牧場、特殊林産物の主産地形成、森林公園の整備など総合的な推進が必要である。

＜資料＞ 熊本県へのルート別出入状況

| ルート別 | 入込割合 | 流出割合 |
|--------------|-------|-------|
| 福岡・佐賀方面(久留米) | 15.8 | 10.5 |
| 日田・福岡方面 | 0.6 | 0.6 |
| 島原・雲仙方面 | 38.7 | 19.3 |
| 〃(天草) | 0.8 | 1.4 |
| 長崎方面(天草) | 0.4 | 0.2 |
| 鹿児島方面(陸路) | 6.6 | 11.7 |
| 〃(天草) | 0.1 | 0.3 |
| 宮崎・鹿児島方面 | 4.9 | 3.3 |
| 別府・大分方面 | 26.6 | 48.1 |
| 県内旅行者 | 5.5 | 4.6 |
| 計 | 100.0 | 100.0 |

(注) 昭和40年11月観光客流動調査(県観光課)による。

九州横断道路・阿蘇スカイライン

別府―阿蘇―雲仙―長崎を結ぶ国際観光道路として、日本道路公団によって昭和三十九年十月に開通をみた九州横断道路は、当初の計画推定交通量(乗地数、城山間二九八台)の約三倍という驚異的な実績を示し、観光道路として実にめざましい成果を収めている。

この一、〇〇〇台に及ぶ交通量は、初年度においてすでに雲仙、阿蘇登山道路と同じ水準に達したわけである。阿蘇登山道路が、昭和三十八年度は五、一八台であったものが、横断道路開通後一躍二倍の一、〇七〇台に及んだことなど、いかに波及効果が大きいかうかがわれる。

過去一年間にこの道路が運んだ観光客はおよそ五〇〇万人であって、熊本県人口の三倍が通過したことになる。

この横断道路の当初計画が、観光を主目標とし、産業開発を副目標として着工されただけに、やはり観光が主体で、産業が従となっているのは、小型車が当初計画の六倍に達していることも明らかであるが、開通を契機に、沿線の各温泉、観光地には競って施設が新増築され、その額は九州横断道路投入額の約三倍の六〇億円(うち阿蘇地区四〇億円)に達しており、特に横断道路周辺の黒川、内牧、湯の谷温泉および一宮町などは目をみはるべきものがある。

このように観光開発の効果が高いので、ともすれば産業開発の効果が薄く、一部では、地価の騰貴によって畜産振興など地につかないとの報告もあるが、これは隣接の九重地区にみられるものであって、幸か不幸か、本県は町村有であったた

めもあって、その傾向はみられないばかりか、昭和四十一年度から五年計画で、一、七〇〇万、約七億円の草地改良が行なわれようとして誠に意欲的である。

一例であるが、一宮町の宮地から北へ約一六キロの外輪山上に狭い草部落があるが、この人達は横断道路の開通によって、下の阿蘇谷まで水田耕作に通っていることや、買物、容易となり、生活水準が向上したと、あるいは、谷内から端辺牧場への道程が、今まで徒歩で往復三―四時間もかかっていたのが、現在ではモーターバイクで一時間もかかからないことなど、有形無形に好影響を与えているの

めざましい観光、産業面の効果

―その後の九州横断道路―

がみられる。特に干し草の運搬は、動力により駄載のときの数十倍もの能率が上っているほか、草地改良機械、改良資材の運搬に大きな力を発揮している。また、阿蘇高菜、牛乳、そして郷土玩具などに至るまで着実に伸びをみせていることも見逃せない。今後、大規模草地改良事業の進展にもともなって牛乳の輸送が考えられるをはじめ、高冷地を菜の輸送も行なわれることとなる。

昭和四十年年度の町村の税収も、商品売上げの向上、タバコ消費税、温泉入湯税、観光施設の固定資産税の増取等により、一宮町で三、〇〇〇万円、阿蘇町で六、七〇〇万円と昭和三十五年の約一・五倍に

増加している。町税ではないが、阿蘇町の料飲税もすでに五、〇〇〇万円にも達しているのがみられる。また、観光施設は、地元労働力を吸収することに役立つが、農村が全国的な出稼の傾向にあるなかで、人口収容力の増加に寄与したことも見逃がせない。

カルデラ美と溪谷美と

―開発を待つ阿蘇スカイライン

一方、九州横断道路につづいて計画されている阿蘇スカイラインは、九州横断道路の狭い草地から分れて、大野川、筑後川の分水嶺を南走し、阿蘇北外輪山上を象ヶ鼻の基部の「木落し牧場」から西走し、天下の大観峰、かぶと岩を経て菊池溪谷の念仏橋に至る約二八キロの路線である。

去る三十五年十月、国民体育大会が熊本で開催されたとき、県は「阿蘇の結果」についてアンケート調査を実施したが、その結果は、「火口」とほとんどならんで「草原美」がすばらしいとの示唆を得て、外輪山開発の確信を得た。

気運にのる主産地づくり

★阿蘇の高冷地そ菜

昔から「とうもろこし」の栽培にたよってきた阿蘇の畑地農業も、高冷地そ菜の栽培導入によって大きな変貌を遂げつつある

すでに主なそ菜の作付面積だけで数百万畝、生産数量一万一、〇〇〇トンを超え、販売金額も、二億円に及びつつある。このような現状からみても、すでに阿蘇の高冷地そ菜は、九州における主要産地としての地歩を確立しつつある。しかも昭和四十年には、国の指定産地としてかんらん、はくさいについて高森町、波野村が指定をうけている。従って今後国の指定産地として大消費地域に対する生産出荷の計画的供給が要求されてきているとともに、産地の近代化を推進していく必要がある。

高冷地そ菜の現状

(1) 産地概要
産地は外輪山東部の波野村、高森町の野尻草ヶ部地区、および火口原地帯の色見、高森



高冷地という自然条件を生かしたそ菜づくりが盛ん(高森町の白菜)

肉牛繁殖育成センター

―阿蘇郡久木野村久石―

どこまでも広がる草原の緑と、点々と草をはむあか牛の姿は、阿蘇の切り離せないイメージとなっている。この熊本独特の肉牛も、現在のようになるまでには、先覚者たちによる長い品種改良の歴史があるのである。

この造成草地では、三十九年から放牧を行なってきたが、極めて良いデータを得ており、良質で、充分な飼料を供給できることはテスト済み。センターでは、当面、生産仔牛率九〇%として、七〇頭の出荷をめざしているが、センター産の優秀繁殖牛から、さらに次々と世代を重ねて、熊本が肉牛王国を創つことも決して夢ではないのである。

種類別生産状況

| 品目 | 面積(ヘクタール) | 生産量(トン) | 販売量(トン) |
|--------|-----------|---------|---------|
| らん球いとう | 87 | 2,920 | 2,510 |
| かんくまぼう | 55 | 1,830 | 1,504 |
| はくさい | 75 | 413 | 306 |
| らんじん | 130 | 2,280 | 1,850 |
| いんげん | 20 | 240 | 190 |
| その他 | 88 | 2,464 | 2,100 |
| 計 | 61.4 | 891 | 554 |
| 計 | 448.9 | 11,038 | 9,014 |

地区が栽培の中心となっている。これらの産地は、標高五〇〇から九〇〇に位置する夏期冷涼な気候条件下にある。降雨量も年平均二、六〇〇から三、〇〇〇と多く、しかも高冷地そ菜の栽培時期にあたる四月から九月にかけて一、七〇〇から一、九〇〇と、この夏半期に集中している。土壌は、肥効の悪い火山灰土壌である。従って栽培されている種類も、かんらんはいくさい、だいこん、にんじん、ごぼうなどの葉菜、根菜を中心に、とまと、きゅうりなど果菜が導入されている。昭和四十年における主なそ菜の生産状況は次表のとおりである。

(2) 産地の推移
古くは、戦前から「黒川はくさい」に代表される高冷地そ菜の生産はあったが、戦後、昭和二十五年―二十六年頃からは、高冷地そ菜に対する試験研究と相まって一部農家での試作が行われ、特に適品種や、栽培法の検討、病虫害防除、市場出

よこがお